

■肢体不自由のある子どもたち・知的障害のある子どもたちへの実践事例

日常生活の自信につながる読書活動の実践報告

横浜市立若葉台特別支援学校

関戸 優紀子

はじめに

本校は、2013年1月に横浜市緑区新治町から移転し、横浜市立若葉台特別支援学校（横浜わかば学園）として開校しました。同年4月に、それまでの30年の歴史ある肢体不自由教育部門（A部門）に加えて、知的障害教育部門高等部（B部門）を開設し、横浜市立では異なる障害種を設置する初の併置校となりました。

横浜市立特別支援学校の中で唯一、A・B部門をもち、さらに校内にコミュニティハウス、カフェのある本校の特徴を活かした教育活動を進めています。私の所属するA部門中学部では授業で育てたシソ、バジル、サツマイモなどをB部門のパン工房へ納品するコラボ授業を実施しています。パン工房のパンはカフェでも売られ、地域の方にも購入していただいています。

本校の学校教育目標「一人ひとりを大切にした教育を行い、地域とともに歩み、自立と社会参加を目指す教育を充実させます」とあるように、A・B部門、それぞれの特性や児童生徒の教

育的ニーズに応じた学びを保護者、若葉台地域、福祉・医療関係者、学校運営協議会などさまざまな関係機関と連携し、充実した学校生活を目指しています。

子どもたちの読書活動面について、横浜市では各学校に学校司書が配置されており、本校でも学校司書が担任と連携を図りながら、A・B部門すべての子どもたちの読書活動を支援しています。また、本校はB部門図書委員会による読み聞かせや朗読劇で、A部門との交流活動を深めた成果として、文部科学省令和2年度読書活動優秀実践校として表彰されました。

活用事例

<中学部3年女子A>

人や物に対して興味・関心が高く、自分から話しかけて会話をすることができます。学習意欲も高い一方で、集中力が続かないことや苦手なことへの取り組み方に課題があります。特に本の読み聞かせでは、最後まで集中して見ることや聞くことができないことが

課題でした。

そんなAさんに、ボイス・オブ・デ
イジーというアプリの入ったiPadを見
せると、さっそく「これやりたい！」
と興味を示しました。初めて読むわい
わい文庫に「なにこれ?」「おもしろ
いね」などすぐに感想がでました。い
くら興味のあるものであっても、最後
まで集中して本読みをするのは、Aさ
んにとってはなかなかむずかしい課題
です。

絵本を読んでいる間は、他の話をし
ないということをルールとして約束し、
本読みを行いました。最初のうちは、
教室内や廊下の声や音に気をとられて
しまうことが多かったのです。そこで、
速度を×1.70、ピッチを×1.05にして
読むように設定しました。すると、よ
く聴いて見るようになりました。

『パパンがパン』や『ケーキ・ケーキ・
ケーキ』、『ことこと ことこと』では
食材が出てくるたびにその食材の名前
を言いながら期待感をもっているのが
伝わる表情をしていました。

『はらぺこあおむし』では馴染みの
ある絵本のように、よく絵を見て数を
数えたり、出てくる食材の名前を言っ
たりしました。

『ぺったん！サンドイッチ』では「は
さむよ〜」や「ぬって」など絵本の中
で繰り返されるフレーズを覚えて音声
と合わせて言うこともできるようにな

りました。最後のお父さんとお母さん
の手に頬を挟まれるページになると、
自分から「やって!」と要求し、教員
の手で頬を挟まれることも楽しんでい
ました。絵本の世界とつながりました。

歯科検診がある日には、検診前に
『わにさんどきっ はいしゃさんどきっ』
を読みました。絵本の中の【どき どき
どうしよう】のわにくんのセリフを聞いて、「痛いよ?」と言い、何かを思い出
すような何とも言えない微笑みを浮か
べました。絵本の世界と実体験がつな
がった瞬間でした。

Aさんは中学部3年生ということで、
進路学習として話し方や返事の学習を
積み重ねています。3人称で呼ぶ自分
のことは「私。」「うん。」は「はい。」
そして語尾に「です。」や「ます。」を
使った言葉遣いなどです。最近では自
分から「私も〇〇です。」や要求時に
「〇〇してください。」と言えるよう
になってきました。学校生活全体で話す
言葉が、とても素敵なものになってき
ました。先日受検をしたのですが、そ
こでも自分の名前を言う際「〇〇で
す。」と言えたり、高等部の教員の問い
かけに「はい。」と返事ができたりした
そうです。

わいわい文庫でのたくさんの本読み
を通じて、ストーリー性のある長めの
絵本も集中して読めるようになったA
さんです。これからも本読みを通じて

語彙を増やしたり、ていねいな言葉遣いを意識し使ったりすることで、Aさんの優しくてチャーミングな人柄や魅力がさらに増していくことを期待しています。



< 中学部2年女子B >

学習意欲も高く、ひらがなが読めます。発語もありますが、発音が不明瞭のため、サインや手話、コミュニケーションカードも用いながらコミュニケーションをとっています。

性格もとても真面目で、人やものへの興味・関心も高いです。内言語も豊かで、自分の思っていることを、何とか人に伝えようとする気持ちもしっかりとっています。その反面で伝わらないことで歯がゆい思いをすることもあります。

『はじめてのおつかい』では、手話やサインを用いながら音声に合わせて読み進める学習をしました。知っている単語や教わった単語が出てくると、自分から手を動かしながら読むように

なりました。



『なぞなぞのみせ』では、なぞなぞのページで画面を一時停止し、考える時間をとりました。Bさんのペースで一時停止や再生ができるので、考えることを辞めずにすみません。しばらく考えると答えが言えるものもあり、教員の「ピンポーン！（正解）」の声に満足そうな笑顔が見られました。

『あいうえおにぎり』は音読（発音練習）の教材として使用しました。速度を×0.80で設定することで、Bさんも画面のハイライトを手がかりに丁寧に発音することを意識して読むことができました。一音一音を丁寧に発音するBさんには、ハイライト機能でいま読んでいるセンテンスが視覚的にはっきりしていることが読みやすさにつながっているようでした。

Bさんは家庭でよく外出をしていて、買い物に対しての生活経験が大変豊かです。先日、校外活動でスーパーに行き買い物をした際には、自分から購入

予定のものがある売り場に行き、スムーズに商品を選んで買うことができました。『はじめてのおつかい』のような商店で買い物をする経験はなかなかないかもしれませんが、『はじめてのおつかい』を読み終えた時に感想を聞くと、主人公が「ぎゅうにゅうください。」というシーンが一番印象に残るとのことでした。主人公のドキドキした感情が、自分もわかるとも言いました。Bさんにとって、自分の思いを人に伝え、それが伝わった時と重なるのではないかと思いました。

今後もコミュニケーションにつながる学習の教材としてわいわい文庫を利用することで、伝わる経験を積み、日常生活の自信につながることを願っています。

おわりに

肢体に不自由があり、重度重複障害のある子どもたちが多く通う本校では、さまざまな姿勢や場所でも、さっと読むことができるiPadを使用した読書活動は、有効な学習の一つになります。もちろん読み手と聞き手のやりとりのライブ感は、紙媒体の本のほうがあると感じます。本をめくる行動や、本の紙の匂いなどがわくわく感を高めます。

しかし、今回の事例にあるように、わいわい文庫の中でページがめくられ、音声が出ることで、教員は生徒の一瞬

見せる表情や、発した言葉やジェスチャーを見逃さずにすみます。また、手話を教える際もスムーズに指導することができます。そして、コロナ禍である今、手軽に消毒ができるiPadの使用は、感染症に配慮を要する子どもたちが多い本校では大変有効であると感じました。

読書は想像力が豊かになり、実体験につなげていくこと、もしくは実体験を思い出すこともできるので、子どもたちの学習に必要なものだと考えます。ひとりで読むことが困難な子どもたちも、日常の中で当たり前のように、自分の好きな時間に読みたいタイミングで読書をするのができたら素晴らしいと思います。

今年度は、校内にわいわい文庫の紹介を積極的にできずにいたことが私の反省です。次年度は、全校に紹介をできるようにし、さらに使用者や使用場面を増やす中で、本校の多くの子どもたちにも、わいわい文庫での読書を楽しんでほしいと思います。

